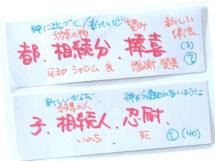
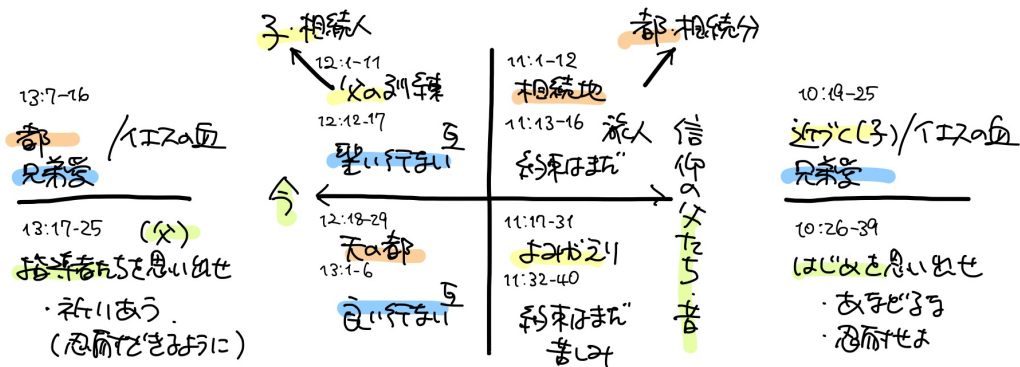




ヘブル人への手紙11:1-13:6

ヘブル10:19-13:25 奮勉のことば 13:22

2017.11.20



- 都・相続分・探査 (感謝と賛美のいけにえ)
- 子・相続人 (王位継承者)・忍耐 (死→いのち・おぼえり)
- 奮勉のことば (13:22) の半分は兄弟愛、「へしほうびはエム」
- 父の父・者・指導者たち - 今、はじめる。あきらめな。

ヘブル人への手紙の11章。信仰によって、信仰によって、という箇所です。もう一度見直しています。

ヘブル人の手紙10章19節から最後(13:25)までが、ヘブル人への手紙の前半、10章の18節までのところが「信ずべきこと」、それに対して(後半10:19〜が)「なすべきこと」という段落の中での位置づけです。

11章の信仰の先祖たちが…というところが、「イエスの血」と「イエスの血」に囲まれて、「信仰」と「愛」、父たちの歴史(信仰)、それを記念し覚えて今このようにしなさい(愛)と言われるこの真ん中(11:1-40)の信仰の先祖たちというところです。

分け方は変わっていません。11章最初(11:1-16)に、創造、アベル、エノク、ノア、アブラハム、サラ、それで都。もう一度アブラハムからですね(11:17-40)。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ。モーセからカナン地の地に入るところまで。それで、その苦しみの中から救われるということの二つの段落に分かれていて、この前提に立って、「だから、このように多くの証人たちが雲のように取り巻いているんですから、こうしようじゃないか(12:1-17)、こうしようじゃないか(12:18-13:6)」というこの書かれてる時の励ましの言葉が2つ書かれています。

ここ(左下)に小さく1とか7とか3とか書いてありますが、この真ん中の4つの段落。真ん中の4つの段落というのはこの4つの話です。ここが、1(11:17-40)、3(11:1-16)、40(12:1-17)、7(12:18-13:6)と考えているというのがここ(別紙左下付箋)に書いてありま

すね。死や苦しみから連れ出されたというよみがえり。約束が与えられる。40年間のその訓練です。そして、天の都に入っていくということで、1, 3, 40, 7という祭りのストーリーの展開がここにも見えるのではということです。

相続人の話(11:17-40)と相続地(11:1-16)と相続文の話。11章の前半を相続文、相続地、(後半の)よみがえりのところを相続人というように考えていたんですけど、わかったようなわからないようなところでした。相続人と言っているほうは、苦しみ、死、滅び、試みから救われる。それが死者の中からのよみがえりということで表されていて、子とされる。勝利を取める。だから恐れるなど言われているところですね。恐れて神様から目を離すことがないように。目に見えない望みから目を離すな、離れるな、恐れるな。恐れると「王の命令を恐れませぬ(11:23)」「王の怒りを恐れな(11:27)」とありますけども恐れるということは、人を恐れるのです。13章6節「人を恐れませぬ。人は私に対して何ができましよう。」神様を恐れなければ人を恐れるということになっています。死を恐れたり苦しみを恐れたり。人を恐れるんじゃなくて神様を恐れる。それが勝利なのです。勝利をする者には、この約束の相続文が与えられるということで、ここ(11:1-16)は約束の相続財産、相続する、約束、約束、約束、都となっていますけど、この約束の地に導かれているので、約束の相続人として天の都を相続するので、恐れるな、目を離すな(11:17-40)。

この約束と言っているものは目に見えないのです。約束だから。まだ見えていない。目に見えない望みを見ている。その目に見えない望みから目を離すなど言われている。信仰の目をもって見るようにと言われているのが、最初のほう(11:1-16)です。

問題になったのがアブラハム、サラの話は約束で都だから、都の話で良いのですけれど、この創造、アベル、エノク、ノア。特にアベル、エノクのところが、なぜ、ここでアベルとエノクの話をするんだろうということでした。創造とノアのところは共通点としては、見えるものが神の言葉によって作られている。まだ見えていない事柄について神から言葉を受けている。神から警告を受けている。その言葉を信じているというノアが、この世界が造られるというところを見えていますよね。それと、アベルとエノクなんですけど、どちらも「あかしされています」と。ささげものが良いささげ物だと神様があかししてくださった。神に喜ばれていることがあかしされていましてということでこのアベルとエノク。ささげ物をするアベル。義人。義人アベルで、義人ノアですね。信仰による義はアブラハムが最初じゃなくてノアが最初ですね。これで言うと。信仰による義。でもアベルも信仰による義ですね。ですから義はいつも信仰によるものなんですけど、ここで義人がいます、義人がいます。エノクは神と共に歩みました。ノアも神と共に歩みましたという共通点があります。アベルは捧げ物をしました。エノクは神様に喜ばれています。どちらも神様に受け入れられている。アベルの捧げ物πものが受け入れられたことをカインは憎むということですよ。神様に受け入れられている。神様に喜ばれている。これがささげ物の話だよということは、この後に並行している箇所13章で「永遠の都を求めているのです。ですから私たちは賛美のいけにえを捧げよう。善を行うことを怠るな。こういういけにえを神様は喜んでくださいます」ということでアベルとエノクが捧げて喜ばれて神と共に歩んで、これは神様に受け入れられているということで、それが都でいちばん喜ばしいことということですかね。神様に喜んでもらっている。神様に受け入れられている。これが都に行くということの一番の目的のようなのですよ。一番の目的がいっぱいあるみたいですけど一番の目的ですよと言われてるような箇所だと思います。

この11章、11章の最初の半分と12章の後半。11章の後半と12章の前半というこのつながりの中でここ(11章前半)に「アベル」がいますけれど12章18節からのところに「ア

ベルの血」ということが出ています。11章の後半に「エサウ」が出てくるのですが12章16節にも「エサウ」が出てきますから、ここ(11章前半)にアベル、ここ(12章後半)にアベル、エサウ(11章後半)、エサウ(12章前半)ということで、このクロスして見なさいよということはそういう形でも表されていると思います。

アベルというところに書いてあるのが、義人たちの霊ですね。生ける神の都。大祝会に近づいていると言っている中に「全うされた義人たちの霊」というこの全うされた義人たちというのがアベルだったりエノクだったり、ノア、アブラハム、サラだということですけど、特にアベルとエノク。ここは全うされた義人。神様に受け入れられた人たちということで、この神の都の段落の中に書かれているのかなと思います。都にいる、受け入れられるということは別の言い方で言うと「共にいる」ということです。神様が共にいてくださるということがこの都にいる。都にいるのがふさわしいものであるはずなのに、苦しみにあっている。共にいないんじゃないかというような出来事がいっぱいありますけど、絶対大丈夫です。一緒にいますということも言われているところです。目を離さないで、望みを持って戦うと言われている段落の「信仰によって」というところですね。